11/3(土) まいど！倫理号です。何人と気持ちのいい天気でしょう。現場での仕事も順調です。

今週の倫理　1106号　2018.11.3 ～ 11.9

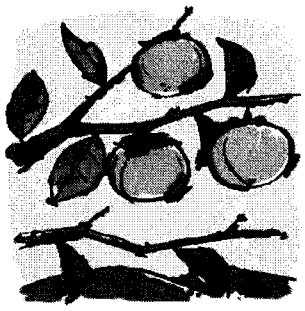
反対や批判する時は代案を示す事がより積極的である
幸せ運がマナー鳥

十一月のテーマ　積極的に生きる

つねに代案を持とう

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一―一九九九）のことばを掲載します。



え・城谷俊也

今日の一句「我を捨てて　一つに参（どう）加（か）く」

ある団体で、執行部が一つの案を出した。ところが一部の者が反対する。

「そんなことは一方的だ。われわれは絶対に反対する」「無理な方法だ。賛成できない」などと口ぐちに反対の意思を表わす。

そこで困った執行部が、「分かりました。賛意を頂けないならば他にどのようなやり方がよろしいのか、代案をおもちの方はありませんか」と問いかけると、今まで騒いでいた連中がぴたりと静かになった。一人も代案など出す者はいなかった。

ある親は子どもの教育について、あれではいけない、これではダメだと学校を批判している。教師に対しても批判が多い。子どもの成績がよくないのは、教育の仕方がよくないのだと思っている。だから子どものほうでも親の心を実演してみせて、学校や教師の批判ばかりし、学習にも力が入らない。

批評とか批判とかということは、誰がしてもよいし、またあって然るべきものである。しかし、建設的な批判とかになると、安易な気持ちではできない。

批評や批判を受ける側では「このように変えたらどうか」というように言われると、役に立つことが多い。「こうしたらよい」という代案呈示的批判は、受ける側にとっても、もっとも手厳しく、かつ有益だということになる。これが建設的批判とか、また役に立つ批評とかいわれるものであろう。

このような問題は、私どもの日常生活にはたくさんある。反対のための反対としかとれないような反対、批判のための批判としかとれないような批判、そうしたものが多いのではないか。お互いに気がつかないで、そうした反対や批判を繰り返すだけで、どうどうめぐりをしているようなことが、相当にあるようである。

一般的にみて、反対や批判をする時には代案を示すのが、より積極的な生き方なのである。目標はあくまで建設にある。

「そのことには反対です。しかしその代わりにこういう案があります。ぜひ取り上げて、研究してください」こうした態度で事にあたることだ。第一に積極さが、第二に建設的な意図が、第三に頼りになれるという感じが、このことから印象づけられる。その代案が立派であればあるほど、相手を強くひきつけるのである。

立派な代案が出せる人、これはその場における勝利者である。広く見れば、人生とは代案の積み重ねによって、築きあげられるものではあるまいか。不用なもの、無益なもの、まちがいなどを捨てて、代わりに有用なもの、ためになること、正しいことなどを明日はやるようにする。

周囲の状況がたえず変転している世の中である。古くて役にたたないものがあれば、不平や不満をこぼす代わりに、新しく役に立つものに替えてゆくことである。

成長している人間とは、たえずよき代案を呈示し得る人のことであり、今日の生活に、新味を注ぎ得る人のことである。

（『丸山竹秋選集』より）